

日本語とタイ語における擬音語・擬態語の対照 ー日本のバラエティ番組における擬音語・擬態語を中心にー

Comparison of the sound-symbolic system between Japanese and Thai - Case study of the sound-symbolic in Japan variety TV program -

ブットウィアンパン・ウィッシュューヌット

Witshoonush BUTVIENGPANT

1. はじめに

日本語が難しいというのは日本語学習者の立場からよく分かる。学習者が困っているのは、多くある漢字だけではなく、よく見聞きする、ひらがなとカタカナで書かれた擬音語・擬態語である。日本語との類似点がある中国語や韓国語母語話者はそう思わないかもしれないが、タイ人学習者はたいていそう感じている。

日本語の擬音語・擬態語は、日常会話やマンガなど、日本人の生活において様々な場合に幅広く直感的に用いられている。しかし一方で、タイ語の擬音語・擬態語は、ふつう子どもの言葉だと考えられており、一部の詩や童謡やマンガ以外ではあまり使われない。そのため、日本語を学ぶタイ人にとって、擬音語・擬態語の理解や習得は、難しいことだと思われる。

そこで本稿では、日タイ両語の擬音語・擬態語について調査・分析し、両者の間の類似点・相違点を明らかにしていきたい。また、日本人が日常生活に様々な場面において直感的に用いられている擬音語・擬態語は、実際にどの言葉をよく使うか、タイ語の擬音語・擬態語に直訳できるかどうかを調べたい。そのため、擬音語・擬態語がよく出現する、日本のバラエティ番組を無作為に選んで調査・分析した。

2. 擬音語・擬態語とは

2.1 日本語

さまざまな研究者による擬音語・擬態語の定義を参照して、李（2012）は下記のように規定した。

擬音語：人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、物を飲んだり、平手で叩いたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音、また、自然界に自然に発する音響や、無生物が、いわば自然に、あるいは、外力の作用を受けて発する音響を、音声で表した言語である。

擬態語：われわれ人間を含む生物、無生物、自然界の事物の有様・現象・変化・動き・成長などの状態・様子を描写的・象徴的に音声で表現したものである。

おおかたの擬音語・擬態語の定義・分別では、「生物・無生物」あるいは、「外界」、「現実の世界」に

よる物音や声を写した語を擬音語といい、その状態を表す言語を擬態語という。

擬音語・擬態語の呼び名は一般的な用語で広く用いられているが、様々な書物によると、擬音語・擬態語を併せてオノマトペまたはオノマトピアという外来語が使われることもある。

2.2 タイ語

擬音語・擬態語とはタイ語で「サタポット」あるいは「カムリアングタマチャート・自然の音を模したことば」と言われている、一般的の呼び名は後者である。しかし、タイ語での擬音語・擬態語の意味として全体的に解説・分類できていない。

3. 日・タイ両言語における擬音語・擬態語の由来

3.1 日本語

金田（1988）は擬音語・擬態語の由来について次のように解説した。

擬音語・擬態語は、もともと固有の日本語、すなわち和語のものと、中国から渡来した漢語のものとがある。その他に欧米から渡来した洋語もあり、擬音語には時計の音「チクタク」があり、擬態語には電光形曲がって進むことを、「ジグザグ」としたのはその例であるが、類例は少ない。ひらがなやカタカナでよく見られる擬音語・擬態語はもともとの日本語だけではなく、中国と欧米から渡来したものもある。

3.2 タイ語

タイ語には仏教系語（バーリ語・サンスクリット語）やカンボジア語が入っているといわれるが、擬音語・擬態語には入っていないと考えられている。タイ語の擬音語・擬態語は普段の言葉ではないため、単純にタイ語で書かれる擬音語・擬態語になる。

4. 日本語における擬音語・擬態語分類

4.1 日本語

擬音語・擬態語はどのように分類されるか様々な方法がある。鈴木、天沼らはオノマトペ（擬音語・擬態語）をある一定の基準を設けて分類する方法で研究を進めた。鈴木は四つの基準で分類した。天沼は日本語音韻の一つを単位（モラー）としてユニークな分類を行った。これらモラーの組み合わせが全部で 47 種類あると述べた。

また、丹野は天沼のモラーを基本においた分類を、各分類パターンの頻度数をとって数量化し、1 拍から 8 拍まで 36 種のパターンを定めた。

擬音語・擬態語のパターンにおいて分類されたものでは、4 拍の型が一番多く、XYXY 型の頻度が一番高い。

4.2 タイ語

タイ語の擬音語・擬態語分類についての先行研究は少ない。しかし、ソンブット・ルンロットスワン(2007)の調査により、フォーマル資料において取りまとめた擬音語・擬態語は1～6拍までで、インフォーマル資料におけるのは1～11拍までと述べた。インフォーマル資料における擬音語・擬態語は日本マンガにおける調査したため、もともとのタイ語擬音語・擬態語ではない。ソンブットは、取りまとめた擬音語・擬態語をパターンによって1拍～6拍に分類した。擬音語・擬態語のパターンにおいて分類されたものは22種類あり、4の型が一番多い。また、フォーマル資料(3種の辞典)において389語、インフォーマル資料(4コマ日本マンガのタイ語訳)において1,433語を取りまとめた。

5. 日・タイ両言語における擬音語・擬態語の特色

5.1 日本語

日本語における擬音語・擬態語の多くは、「CV」(子音+母音)から成り立つ1モーラ(音節)ないし「CVCV」(子音+母音+子音+母音)の2モーラを語基としている。

5.1.1 1モーラの語基を持つ擬音語・擬態語の形態

ふと思い出す。つと立ち上がる。など。1モーラの語基で構成されているものでも「促音」(っ)や「撥音」(ん)が付いたり、母音が長音化されたものも多く、また語基を繰り返す形態(反復形)も一般的である。1モーラの語基から成るものは、ほとんどが擬音語である。

5.1.2 2モーラの語基を持つ擬音語・擬態語の形態

ぐい(と)、はた(と)、ひし(と)など、日本語における擬音語・擬態語は、2モーラの基本形を持つものが最も多い。

5.1.3 反復形

がたがた、きらきら、ばたばた、べたべた、など、2モーラの反復形変種ものもある。

さらに、2モーラの間に促音ないし撥音が付加され、「り」が語末に付いている形態である。

日本語における擬音語・擬態語の形態は、基本形として1モーラないし2モーラの語基を持つ。しかしながら、語基がそのまま使われているものはきわめて希である。促音化・撥音化・「り」の付加・長母音化・反復が、日本語における擬音語・擬態語の形態的特徴である。

5.2 タイ語

タイ語における擬音語・擬態語の一番短い形態は、「CV(子音+母音)」または「CVC(子音+母音+コーダ)」から成る一音節のものである。しかしながら、日本語同様に一音節だけで用いられるものは少ない。しかも、現代語では、ほとんどが擬音語である。

5. 2. 1 一音節の語基を持つ擬音語・擬態語の形態：

「kriid（驚き恐れる高い悲鳴。「きゃー」に近い）」、「pang（打ち上げ花火や銃などの音）」のように、一音節の形態だけで使われているものも見られるが、一般的には、「kriid-kriid」「pang-pang」のように音節を繰り返すものが非常に多い。

5. 2. 2 二音節の語基を持つ擬音語・擬態語の形態：

「kee-kee kang-kang（「kee-kang」の連続的な意味を表す）」、「ngok-ngok ngern-ngern（ngok-ngernの連続的な意味を表す）」、「tum-tum tom-tom（心臓がときどきするさま。また運動、興奮、恐怖、不安などで激しく動揺するさま）」、二音節の反復形で四音節の形態を持つものである。「XXYY」と「YXYX」の形態を持つもので、動作・状態の継続を表すものが非常に多い。

次は、語基の後部が変化した「YXZX」の形態である。「ka-rung ka-ring（もろく砕けたりくずれたり、ばらばらになったりするさま）」、「kra-mup kra-mip（口を十分開けずに小さい声で言うさま。また小言や独言を言うさま）」、「ra-yip ra-yap（連続的に星や宝石などが光るさま）」は、反復形変種だと考えられる。「ka-rung ka-ring」や「kra-mup kra-mip」の例は、「rung-ring」や「mup-mip」という語だけでも意味を表すことができる。そのため、二音節を使用する場合もある。

タイ語において普通に使用されている擬音語・擬態語は、一音節・二音節の語基を持つものが非常に多い。一音節は最も短い形態であり、擬音語として使われているものが過半数を占めている。一音節の語は単一形態としてはあまり使われていない。一般的には反復形が多い。

また、最も典型的だと言える形態は、反復形であろう。母音だけが変化したものや子音及び終結部が変化したものである。「XXYY」（kee-kee kang-kang）、「YXYX」（kra-sik kra-sik）の形態であり、また、「YXZX」（ka-rung ka-ring）の形態である。なお、「eak ii eak eak（こけこっこう）」のような特殊形態もあるが、希である。

さらに、強調を表すため一音節を二回以上繰り返したものもある。ただし、マンガや文庫以外ではほとんど用いられていない。例えば、「tuk tuk tuk ⇒バタバタバタッ」などである（『ピーチガール』上田美和著 日本語版とタイ語版 2002 年）

5. 2. 3 日本語とタイ語の対照

次は、擬音語・擬態語の形態的特徴についての比較を行う。

日本語における擬音語・擬態語の一番短い形態は一モーラであり、タイ語では一音節である。日タイ両語における擬音語・擬態語の最も典型的な形態は反復形である。

また、音が一部変化した反復形変種もよく用いられる。英語においても、「flip-flap（ばたばた）」「murmur（ざわざわ）」「click-crack（ぱちぱち）」のような反復形は多い（『日英擬音・擬態語活用辞典』尾野秀一編著）。例えば、「flip-flap」という英語は、日本語では「ばたばた」に、タイ語では「ngun-ngaan」ないし「plun-plaan」に当たる。

反復形が用いられているのは、日本語とタイ語だけではない。日本語の擬音語・擬態語には、「促音」

(っ)、「撥音」(ん)、「り」が付加されたり、あるいは長母音化の起こったものが多く見られるが、タイ語においては、これらの現象が見られない。タイ語は「CVC」という音節を持ち、終結部（コーダ）を持つため、各音節の間を完全に分けるので、「促音」(っ)が付く形態が見つからないと考えられる。「撥音」(ん)は、タイ語において終結部の一つだと考えられているので、「撥音」(ん)を付加する形態がないのである。また、強調のための長音化はタイ語では見られない。タイ語には、既に母音の長短による区別があるからである。

6. 調査対象と調査方法

6.1 調査対象としてのバラエティ番組

日本人は日常生活に多くの場面で擬音語・擬態語を用いるといわれている。それは日本人と会話をしなくても、字幕がでる日本のテレビを見ると分かると思う。特に、様々な感情を表せる出演者のバラエティ番組が多いと考えられる。バラエティ番組において出現する擬音語・擬態語は漫画において出現するものより日常生活に使われるものが見られるため、調査対象にした。なお、日本のバラエティ番組には擬音語・擬態語習得といわず素晴らしいものが多く、学びの可能性が無限に広がっていると考えられている。

6.2 調査対象の枠組み

調査対象のバラエティ番組は放送していた日本とタイのバラエティ番組、それぞれ1つを任意に抽出した。それぞれの番組を10時間視聴して調査・分析した。

- 1)『VS 嵐』：フジテレビ：毎週木曜日夜 07:00～放送
- 2)『Sunshine Day』：CH3：毎週日曜日午後 03:00～放送

6.3 調査方法

日本・バラエティの場合は、取りまとめた擬音語・擬態語は丹野編によって分類する。

タイ・バラエティの場合は、取りまとめた擬音語・擬態語はソラブッドによって分類する。さらに、両言語の擬音語・擬態語を対照する。

7. バラエティ番組に出現する擬音語・擬態語

7.1 日本・バラエティ番組に出現する擬音語・擬態語

日本・バラエティ番組に出現した擬音語・擬態語を、丹野論によって分類した。

種 類	1.XY 型	2.Xt 型	3.X:型	4.XYt 型	5.XYr 型	6.XYn 型
(*)頻度	ホラ アタタタ(2) やん(3) へい(2)	おっ(4) よっ(2) ハッ えっ(3) ねっ ふっ	あ～(2) オー えー			ニユン カモン(2)
合 計	5	6	3	-	-	2
種 類	7.XtY 型	8.XY:型	9.X:Y 型	10.X:t 型	11.XYY 型	12.XYXY 型
(*)頻度	ホット	うわ～		オーツ あーっ		ぎりぎり(2) ニコニコ ポンポン(2) パンパン(2) へろへろ ヒリヒリ コロコロ バンバン ニヤニヤ
合 計	1	1	-	2	-	9
種 類	13.XYZY 型	14.XYXZ 型	15.XYZW 型	16.XYrt 型	17.XtYZ 型	18.XtTr 型
(*)頻度						やっぱり
合 計	-	-	-	-	-	1
種 類	19.XtYn 型	20.XnYr 型	21.XY:r 型	22.XY:t 型	23.XY:n 型	24.X:Yr 型
(*)頻度					ガアーン	
合 計	-	-	-	-	1	-
種 類	25.X:Y:型	26.XYYZ 型	27.XYXYt 型	28.XtXtX 型	29.XYZXYZ 型	30.XYZXYW 型
(*)頻度					ピャンピャン(2) ゴチャゴチャ	
合 計	-	-	-	-	2	-
種 類	31. XYXYXY 型	32. 6 拍その他型	33. XYXYXYt 型	34. 7 拍その他型	35. XYZWXYZW 型	36. 8 拍その他型
(*)頻度						
合 計	-	-	-	-	-	-

以上のように、36 種類のうち、11 種類のみ出現し、12 型が一番多い。12 型は XYXY 型 で、例えば「ぎりぎり」「にこにこ」「にやにや」などで、実際の生活にもよく聞かないかと考えている。二番目と三番目は 2 型と 1 型の順番になっている。

一方、拍によって分類してみれば、2 拍の擬音語・擬態語が一番多く、1 型～3 型のものである。二番目は 4 拍の 12 型～26 型で、三番目は 3 拍の 4 型～11 型のものである。

7.2 タイ・バラエティ番組における出現する擬音語・擬態語

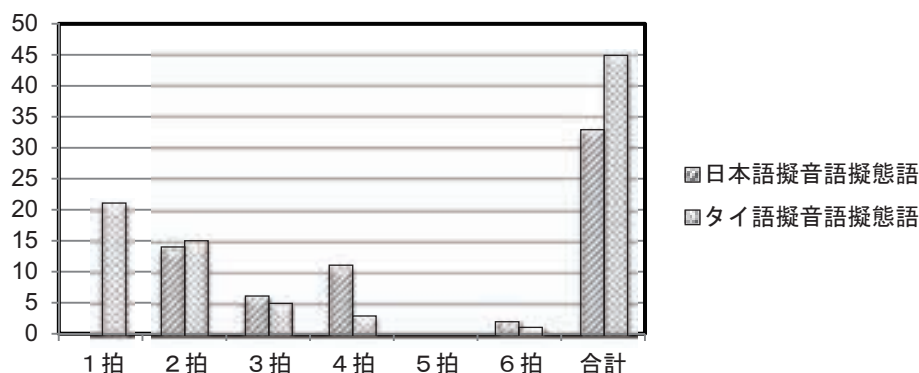
タイ・バラエティ番組に出現した擬音語・擬態語を、ソラブッド論によって分類した。

種類	1.X 型	2.XX 型	3.XX ² 型	4.XY 型	5.XXX 型	6.XYX 型
合計	21	7	4	4	5	-
種類	7.XXY 型	8.XYY ² 型	9.XX ² X ³ 型	10.XXXX 型	11.XYYY 型	12.XYXY 型
合計	-	-	-	-	-	2
種類	13.XYXY ² 型	14.XYY ² Y ³ 型	15.XYY ² X 型	16.XX ² X ³ Y 型	17.XXX ² X ² 型	18.XX ² XX ³ 型
合計	-	-	-	-	-	1
種類	19.XX ² YZZ ² 型		20.XYY ² XYY ² 型		21.XYY ² ZVW 型	22.XYY ² XYY ² 型
合計	-		-		-	1

タイ・バラエティ番組における出現した擬音語・擬態語で、ソラブッド論によって分類した。22 種類のうち、8 種類のみ出現し、1 型が一番多い。2 番目と 3 番目は 2 型と 5 型の順番になっている。一方、拍によって分類してみれば、1 拍の擬音語・擬態語が一番多い。二番目は 2 拍の 2 型～4 型で、三番目は 3 拍の 5 型～9 型のものである。

7.3 日本・タイ両国のバラエティ番組に出現した擬音語・擬態語の比較

日本・タイ両国のバラエティ番組に出現した擬音語・擬態語の度数を表すグラフを下表に示す。



日本語の擬音語・擬態語は 2 拍～8 拍までの種類があるが、調査した結果は 5 拍、7 拍と 8 拍がない。一方、タイ語の擬音語・擬態語は 6 拍の種類があり、5 拍のものだけが出現しなかった。合計を見ると、案外な結果で、タイ語の擬音語・擬態語は日本語のものより多い。

8. まとめ

調査した日本語とタイ語の擬音語・擬態語の特徴を述べる。

- 1) 日本番組における出現した擬音語・擬態語は大体カタカナ字で書かれた。
- 2) 日本番組における出現した擬音語・擬態語は意外に少ないと考えている。

- 3) タイ番組における出現した擬音語・擬態語は辞書に載っていないものがあり、歓楽のために使われたと考える。
- 4) タイ番組における出現した擬音語・擬態語は1拍の感情を表す擬態語が多いと思われる。

参考文献

- 浅野鶴子・金田一春彦編 (1988) 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店
- 天沼寧編 (1974) 『擬音語・擬態語辞典』 東京堂出版
- 李大年編 (2012) 『日本語と韓国語における擬態語の対象研究』 城島印刷社
- 丹野眞智俊 (2005) 『オノマトペ《擬音語・擬態語辞典》を考える』 あいり出版
- 亭阪直行編 (1999) 『感情のことばを研究する』 角川書店
- ソラブッド・ルンロートスワーン (2007) 『タイ語の擬音語・擬態語』 Mae Fah Luang University 芸術学部紀要
- 田守育啓 (2010) 『オノマトペ 擬音語・擬態語をたのしむ』 岩波書店
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (2005) 『オノマトペー形態と意味ー』 くろしお出版
- 尚学図書 (1991) 『擬音語・擬態語の読本』 小学館
- パンニパー・ストーンムニ (2003) 『日タイ両語における擬音語・擬態語について』 国際センター、広島大学
- 『情報文化研究』 第12号 名古屋大学情報文化学部・名古屋大学大学院 人間情報学研究科

Exchange student life in Kyoto

To be an exchange student was one of my dream that has come true. First of all, I would like to say thank you to my advisor Sasaki sensei for giving me this beautiful and valuable opportunity and helped me everything between living here. I would also like to thank MEXT, Kyoto University of Education for accepting me in this program, and Thailand for allowing me to go and improve.



I went to Japan many times but just for a short time of travelling and visiting relatives in Kanto area. The year before being an exchange student I came to Kyoto one time for two weeks. It was my first time visiting Kyoto. It is different from other cities I had visited. There are a lot of beautiful temples and shrines, natural sightseeing spots that I really like. In addition to that, it is a safe city with good public transportation system and the people are also nice. As Kyoto is traditional city, I could experience many cultural activities such as kimono, tea ceremony (sadou) and flower arrangement (ikebana), etc.

Academically I have improved. As a matter of fact, attending many lectures, I have learned more educational information, and as the lectures are in Japanese I have also improved in Japanese skills. Sometimes I could not understand some lectures because of the Japanese level but some classmates would help me, I am grateful for that. As a Japanese language teacher these lectures helped me get new teaching methods. On Saturday, I used to take English classes; this has been valuable for me improving my English skill.

For my whole stay I was sleeping at the International House. There for I made other international students with whom I exchanged experience and together we carried out many activities. This has also enriched my experience. Some Japanese students also stay in the same place, and they helped me going to places I did not know and explaining to me important things I did not know. In fact I was worried from the beginning about how I would be able to live. However, making many friends was useful as they helped me a lot and made my stay more comfortable and fun.

As a whole, I am glad for this study abroad experience. It increased and widened my abilities and potential, enabling me at the end to go in to the graduate school. I plan to take everything I have learned to my country and contribute to its development.

Witshoonush Butviengpant